





## 推薦文

### あり得たかも知れない 「もう一つの戦後」

加納実紀代

(敬和学園大学)

かつて、皇居前広場が人民広場と呼ばれた時代があった。敗戦から一九五〇年代初期の時期である。一億玉碎を生き延びたかつての「臣民」のなかには、象徴天皇に統合される「国民」を肯んぜず、「人民」にこそアイデンティティを見いだす数多くの人びとがいたのだ。「人民文学」にはそうした人びとの思いが凝縮されている。

『人民文学』刊行の時期は朝鮮戦争にほぼ重なる。戦後史を振り返れば、朝鮮特需によって日本は戦後復興を遂げ、高度経済成長にだれ込んでいくのだが、『人民文学』の目次をたどれば、けっして人びとはただそれに踊らされていたのではないことがわかる。単独講和による独立や警察予備隊批判、原爆、松川事件など占領下の弾圧問題、また松田解子の花岡事件をテーマにした「地底の人々」が連載されているように、朝鮮・中国に対する日本の加害責任もしっかり直視されている。

女性筆者もけっこう多い。豊田正子・松田解子・山代巴などのプロ作家のほか、サークル運動の女性たちのさまざまな表現活動も載っている。この激動の時代、「人民」たる女性たちは何を考え何を感じ、それをどう表現したのだろうか。そこからは商業雑誌からは見えない女性たちの姿が浮かびあがってくるにちがいない。

『人民文学』の復刻は、あり得たかも知れない「もう一つの戦後」の証言として、大きな意味を持つ。



### 〈人民〉の揺らぎ、その可能性

坪井秀人

(名古屋大学)

英語でpeopleは常にpeopleであり、それは揺らぐことはない。〈庶民〉から〈国民〉まで多様な領域を内包するからこそ、peopleのこの揺らぎのなさには、逆にいかががわしさが付きまとう。雑誌『人民文学』が立ち上げた〈人民〉という主体は、一九五〇年代日本の同時代のはげしい波にもまれながら、そうした〈いかががわしさ〉をするべく突き抜けて、私たちの目の前に、いままさによみがえろうとしている。『人民文学』を繙くと、ところどころで、日本国内はもとより中国や朝鮮半島あるいは他の海外地域の〈人民〉との連携をうたう言説や表象に出会う。その末期には国民文学論の拠点メディアの一つともなった『人民文学』も〈民族〉や〈国民〉の一国主義的な枠組から自由であったわけではない。だが、『人民文学』が主体化した〈人民〉は、普遍を目ざしつつも普遍に落ち着くことのない、はげしい揺らぎを体現しつつ存在だった。占領体制と片面講和への途、松川事件ほかの国内の諸事件、そして朝鮮戦争、革命後の中国など、揺れ動いてやまぬ東アジアの圏域のなかで、日本列島の来し方行く末をまなざし、あるいは労働者として、あるいは作家として、現場に入り込む、この雑誌の〈人民〉たちの足取りは、勇ましくれば勇ましいほどに、あぶなつかしい。だが、そのあぶなつかしい足取りを見直すことを通して、いまの私たちには、peopleの普遍主義とはまったく異なった連帯と協同への道筋の可能性も見えてくるのではないだろうか。

### 五十年代文化を 考える必見資料

島村輝

(フェリス学院大学)

サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約が調印された一九五一年の前後は、近現代の日本とそれをめぐる地域の歴史の上で、あらゆる領域にわたって、一種の「特異点」ともいうべき複雑な状況が現出した時代だといってよからう。そうした状況を背景に創刊された『人民文学』といえ、戦後の民主主義文学運動のなかで、日本共産党の「五〇年問題」分裂と内部抗争の影響を強く受けた政治思潮を代表する雑誌の一つであると、一般的には理解されてきた。しかしこうした見方も、上述のような強風を経験した当事者たちの印象を映した、一面を強調して描かれた「特異」な姿だっただけではないだろうか。この時代からおよそ六十年を経た現在その内容を総覧して感じるのには、思いの外に多様な分野から、また多様な思考方法を持った書き手たちが結集していたということだ。作家・批評家・詩人といったいわゆる文学関係者ばかりではなく、美術家・俳優・映画関係者たちが数多く執筆に参加しており、野間宏、安部公房ら若手作家たちの、その後のイメージとは違った姿を見出すこともできる。このたび『人民文学』の全貌が復刻刊行されることで、この雑誌に対する従来のイメージも大きく変わり、この時代と文化を考える上での新たな発見がいくつもなされていくに違いないと期待する。多喜二研究の立場からは、付録に収録される岩上順一の『小林多喜二と人と作品』も大変貴重である。

### あらたな戦後史像のために

成田龍一

(日本女子大学)

思い起こしてみると、『人民文学』を一冊ずつ手に取りページを繰ったのは、二〇〇〇年ころのことであった。保存している図書館がほとんどない状態であるうえ、狭義の政治を優先した雑誌という先入観もあり、長いあいだ『人民文学』に接することをかまけていた。しかし一念発起して読み進めて行くうちに、当初の先入観が次々に覆されていくことになった。

なるほど『新日本文学』への対抗意識をむき出しにした記事もあったが、東アジアとの連帯や朝鮮戦争をめぐる動き、現状の変革を正面に据えた活動の様相が生き生きと伝わってきた。世界各地の人民文学の情報が紹介されること、在日朝鮮人の執筆者が多いことも目を惹いた。加えて、読者からの投書や、カットや図版も興味深かった。

思うに、一九五〇年代はイデオロギーの時代であり、さまざまな現象がそのフィルターによって解釈され論じられていた。いま、半世紀たつてこの事態を歴史化するとき、生活世界と政治とを切り結ぼうとする「人民」の営みが見えてくる。そして、そうした人びとのエネルギーを背景に『人民文学』はサークルを介し、広義の文学活動を行っていた。いや、その人びとによって『人民文学』が存立し、「書く人民」を生み出していった。

こうした『人民文学』により一九五〇年代を考察するとき、戦後の光景もまた一転することになる。そして、このことは政治と文学の再定義を促すことにもなるはずだ。

